



発行：NPO 法人蔵王のブナと水を守る会
(ナショナル・トラスト事務局)

〒989 - 0231 宮城県白石市福岡蔵本字滝下 102

ホームページ： <http://www.zao.org>

蔵王の山頂部は紅葉が始まり風も冷たく、一段と秋の気配が感じられる頃となりました。宮城県には「まん延防止等重点措置」が出されており、まだまだ活動には制限があります。秋の森作りイベントは開催を見送ることになりました。そこで、いつもは白黒版でお送りしている植林地内の様子を今回はカラー版でお届け致します。花の色等が分かり楽しんでいただけるのではないかと思います。1年を通じてたくさんの植物を楽しめる豊かな森になって来ました。皆さんとまた一緒に活動出来る日を願っています。

《トラスト地内に元からあった大きな広葉樹の調査を終えて》

(2021年9月) 仲村 得喜秀

東北大学農学部教授の清和研二氏の著書『多種共存の森』(2013年)という本がある。その森は宮城と岩手の県境にある自鏡山という低山にあるという。直径1mを超える巨木、しかも樹種が多様なのだという。ブナ、コナラ、イヌブナ、イタヤカエデ、イヌシデ、ハリギリ、ケヤキ等の巨木が30mから40m毎に出てくるのだという。私はこの本を読んですぐに清和氏に手紙を書いて、その後2度程電話で長話となった事がある。氏は現在の針葉樹のみの林業を針広混交林を主体としたものにしたいと力を尽くしていて、その事を語るときの熱量は大変なものがあった。できれば私達の森も見えていただきたかったが、退官も近いという事で多忙らしく来ていただく事はできなかった。私達が今森作りをしているこの一帯は、標高は700m内外と低く、地形はなだらかである。前述の自鏡山と非常に良く似た環境ではないかと思っている。標高が1000m前後になるとブナが圧倒的に優先してしまうので、多様な森の適地は山地帯の下部という事になる。

今回トラスト地の木地調査では、35種の樹木が確認されている。シラカバとソメイヨシノを除けば全て、この一帯に自生している樹種である。この一帯が戦前までブナの原生林であった事は、八島家(リスの森隣接地)の背後にあるブナの残存林を見ればよくわかると思う。この後背林にはブナ、ミズナラなどの他にも多くの樹種があり、特に驚いたのは、ニガキとイヌエンジュの木がまっすぐに伸びて、高さ15mの高木層まで届いていた事である。33種の自然木といい、この標高や地形から判断して、かつてこの一帯もブナやミズナラばかりではなく、自鏡山のような多種共存の森だったのではないかと思っているのだが、どうだろうか。そういう意味においても今回の調査は非常に意味のあるものだったと思っている。私自身、ここまで多くの樹種を確認できるとは思ってもいなかった。植林地の中の林床では多くの実生苗を見る事ができる。確認された35種のうち、32種については実生苗を見る事ができる。つまりこの調査木達は植林地内外に対して多くの種子を散布している事になる。

周辺部の空地などがあれば、人が手を加えなければ、短期間でこれ等の樹種の森になっていくはずである。更に、これ等の多様な樹木達の果実や種子は多くの動物の食料となるはずで、豊かな生態系を作り出している原動力にもなっているはずである。1本のブナやミズナラの木には数万個の実がつくはずで、それが今回は数までは数えなかったが、100本単位ではあるはずだから、相当量の食料生産工場であるといえる。現在行っている定点カメラに写っている動画に出てくる動物はいずれも丸々と太っている個体ばかりである。更に言えば、これ等の調査木はまだまだ巨木とはいえず、中木程度である。つまりまだまだ伸びて、空気中の炭酸ガスを吸収し続け、温暖化防止に役立ってくれるはずである。木や森の事を考えるととても幸せな気分になります。森は癒しの空間でもあります。顧問だった西口先生には『森林への招待』（八坂書房）という著書があります。みんなで招かれましょう。

2021.4.11 キクザキイチゲ



2021.4.11 コブシ



2021.5.9 アキタテンナンショウ



2021.6.13 バイカウツギ



2021.6.6 リスさん来てくれ



2021.6.13 彩遊の森 フキ



2021.6.13 ガマズミ



2021.6.27 ミツデカエデ 小鳥の森



2021.7.25 キンミズヒキ



2021.7.25 ?蝶



2021.8.8 シシウド



2021.8.22 レンゲショウマ



2021.09.12 ゲンノショウコ



2021.09.12 ツリフネソウソウ



《35周年記念誌を作成中です》

今年は、当会発足から35周年の記念すべき年です。盛大にお祝いしたいところですが、残念ながらコロナ禍によりお祝い行事ができません。そこで、盛大に(?)35周年記念誌を発行することにいたしました。

前回発行の25周年記念誌から10年が経過していますので、10年間の活動報告となります。この10年は当会にとって「変革の10年」となりました。試行錯誤しながら変革していく様子を、賛助会員の皆様にもお伝えできればと思っています。また、できるだけ写真を多く掲載し、植林地の四季の素晴らしさも感じていただきたいと願いながら作成しています。現在は、最後の校正段階に入っておりますので、冬が来る前にお届けできると思います。

どうぞお楽しみにお待ちください!

《動物生態調査のカメラが5台に!》

カメラを設置しての動物生態調査が順調に進んでいます。今年はカメラを5台に増やすことができました。調査班は2週間ごとにデータを収集し分析しています。時間のかかる分析を終えて、やっとホームページにアップできるのです。毎回苦労しながらの作業ですが、お馴染みのアナグマやタヌキ、イノシシに交じって思いがけない動物が撮影できる楽しみがあります。クマがクワの木に登り実を食べながら糞をしている様子、テンが鳥の巣箱を狙っているところ、フクロウがぐるりと首を回す様子、平均台を歩くキツネ、突如現れた大きなシカなど。最近では、待ちに待ったリスの撮影ができました。毎回、会員も楽しみにしています。

是非、ホームページの動物の生態調査をご覧ください。なかなか面白いですよ!

ナショナルトラスト基金報告

ナショナルトラスト基金をお寄せいただき、ありがとうございました。

2021年1月～8月の累計は、以下のとおりです。

2021年度件数 16件

2021年度金額 79,800円